

比較文化 II [第10回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

●知の巨人・梅棹忠夫

▼梅棹忠夫・略歴

1920年、京都・西陣の商家に生まれる。府立一中時代、今西錦司の講演によって登山・探検に目覚め、山岳部で活躍。三高時代から今西の指導を受け、白頭山登山、樺太探検に参加。京大理学部に入學後、ポナペ島探検隊、大興安嶺探検隊に参加。43～45年、蒙古善隣協会西北研究所嘱託として満州に滞在。終戦で帰国後、国内での農村調査などをしてしながら、マナスル登山隊計画に参加するも、結核で断念

1955年、京大カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加。モゴール族を調査後、インドへ自動車の旅をする。57年、「文明の生態史観序説」発表。大阪市立大学東南アジア学術探検隊でタイ、カンボジア、南ベトナム、ラオスを回る。62年にもビルマ、東パキスタン、インド、ネパールを踏査

1963年、京大アフリカ学術調査隊で、タンザニアに滞在。その後、70年に大阪で開催される万博の企画にかかわるようになる

1967年、京大ヨーロッパ学術調査隊に参加し、バスクで農村調査後、各国を回る。『文明の生態史観』刊行。68年、京大サハラ学術探検隊でリビアに滞在、69年にはヨーロッパ学術調査隊でイタリアとユーゴスラビアに滞在

1973年より、国立民族学博物館準備室長。74年より同館長。以後、博物館の視察を兼ねて、各国をめぐる旅が続く。79年頃から中国各地での踏査が増え、往来が頻繁に。86年に中国旅行中にウィルス性の視神経炎にかかり、視力を喪失（64歳）。89年より『梅棹忠夫著作集』刊行開始

1993年、国立民族学博物館館長を退任

2008年、米寿記念シンポジウムが開催

2010年、7月に死去（享年90歳）

▼主な著作

1956『モゴール族探検記』（岩波新書）

1964『東南アジア紀行』（中公文庫）

1965『サバンナの記録』（朝日選書）

1967『文明の生態史観』（中公文庫）

1969『知的生産の技術』（岩波新書）

1976『狩猟と遊牧の世界 自然社会の進化』（講談社学術文庫）

1978『民博誕生』館長対談（中公新書）

1986『日本とは何か——近代日本文明の形成と発展』（NHKブックス）

1987『日本人のこころ——文化未来学への試み』（朝日選書）

1988『情報の文明学』（中公叢書、中公文庫）

1989『情報論ノート』（中公叢書）

1989-1994『梅棹忠夫著作集』全22巻+別巻（中央公論社）

1990『情報管理論』（岩波書店）

1997『行為と妄想——私の履歴書』（日本経済新聞社）

2000『近代世界における日本文明——比較文明序説』（中央公論新社）

2001『文明の生態史観はいま』（編著）（中公叢書）

2008『梅棹忠夫に挑む』（石毛直道・小山修三編）（中央公論新社）

2010『梅棹忠夫 語る』（聞き手・小山修三）（日本経済新聞社 日経プレミアムシリーズ新書）

●「文明の生態史観」の概要

▼『文明の生態史観』収録論考

1. 東と西のあいだ（1956.2）
2. 東の文化・西の文化（1956.2）
3. 文明の生態史観（1957.2）
4. 新文明世界地図——比較文明論へのさぐり（1957.1）
5. 生態史観から見た日本（1957.1）
6. 東南アジアの旅から——文明の生態史観・つづき（1958.8）
7. アラブ民族の命運（1958.8）
8. 東南アジアのインド（1958.9）
9. 「中洋」の国ぐに（1962.1）
10. タイからネパールまで——学問・芸術・宗教（1962.2）
11. 比較宗教論への方法論的おぼえがき（1965.12）

▼「中洋」の“発見”から「文明の生態史観」へ

若い頃からのアジア各地の探検・フィールドワークで現地を見てきた経験

とくに1955年のカラコラム・ヒンズークシ調査隊（『モゴール族探検記』）

ドイツ系米国人歴史学者の車に同乗してカルカッタまで旅行し、広く見聞

インドにはわれわれの想像を絶した世界が存在する

インド世界はアジア（東洋）ではない

同じアジア（東洋）に属しているのに、政治・社会・文化・宗教などが日本とこんなに違うのはどうしてか？

「東洋」とは、ヨーロッパ人がつくった「ヨーロッパ以外」を表わす消極的な概念

「東洋」はひとつではない。東洋と西洋にはさまれた「中洋」という概念が必要

ニューデリーで出会った日本人留学生の言葉「ここは中洋ですよ」

人口も多く、地域としての範囲も広い。西欧の拡張以前は中洋が世界の中心だった

▼トインビーの来日をきっかけに「応答」

偉大な学説だとトインビー説には感心してしまったが、しかし改宗はしなかった

ヨーロッパ文明だけが健全で、あとの文明は解体期にある

日本は中国文明→西欧文明への改宗者

「やっぱり西欧人なんだなあ」

トインビーはスケール（尺度）が大きすぎて、数千年の歴史も同時代とみなされることもあり、違和感を覚える

「日本文明は12世紀から解体期に入っている」

非西欧人（日本人）がトインビーと同じ方向で世界史にアプローチしたら、ちょっと違ったものができるのではないか

その「応答」が、「文明の生態史観」

▼機能論と系譜論——日本の座標

これまで歴史は系譜論的にとらえられてきた

文明（文化）の「由来」をもって世界史を語る

過去における「～史観」のほとんどがこの立場

日本文化は中国から伝わったものがほとんどで、インドからのもの（仏教）もある → 東洋的

明治の「開国」以来、西欧の文化が入る

文化の流入の歴史から言えば、日本は西欧文明への接触が最も遅れた国のひとつ

インドや中国、トルコなどのほうが先に近代化＝西欧化してもよさそうなもの

なぜ明治の日本だけがいち早く近代化できたのか？

系譜論的な立場だけでは、正しい「日本の座標決定」は無理

縦糸だけでは布は織れない

横糸の1本として「生態史観」を提出

▼機能論的な見方の導入

その文化か「どこから来たのか」ではなく、文化の担い手たる共同体の「生活様式の問題」としてとらえる

それぞれの文化要素がどのように組み合わせり、その社会に働いているか

鉱工業・商業・通信・ジャーナリズム・平均年齢・教育・学問・芸術・宗教などが、社会においてどのような意味と価値を持っているか

これらの文化要素が日本とほぼ同じ機能を果たしているのは、西欧と米国しかない

旧世界を第一地域（西欧・日本）と第二地域（その他）に分けて考える

この考え方を説明するのが「文明の生態史観」

●理論の骨格

▼第一地域と第二地域

日本と西欧は似ているような気がするのはなぜか

旧世界の東西に位置して交渉がなかったのに、両者の歴史は驚くほど似ている

→平行（並行）現象

民族共同体で構成される

国全体として高度な文明国でありえたのは、日本と西欧のみ

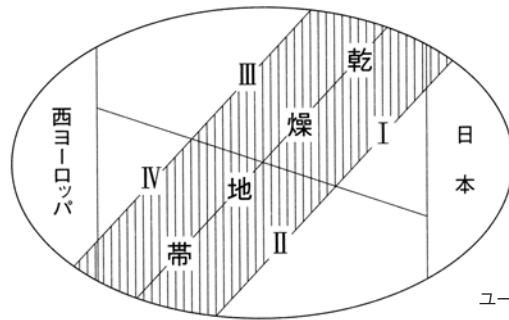
逆に日本と西欧を除いたユーラシア大陸（旧世界）全体も、ひとまとめにして考えられそう

文明の発祥地 → 衛星国家に囲まれた大帝国

I 中国／II インド／III ロシア／IV 東西ローマ帝国→トルコ

無数の小国家群と多数の異民族で構成される

それぞれの地域での大帝国は解体したが、文明としての統一性は失われていない



ユーラシア大陸の文明構造 (模式図A)

▼地理的に見た旧世界

東北から西南へと旧大陸を斜めに走る大乾燥地帯

砂漠・オアシスの地帯とステップ地帯

遊牧民の生活する地域

乾燥地帯は、悪魔の巣窟

飢えたときではなく、満ち足りたときに農耕社会を略奪

第二地域は、大乾燥地帯に隣接

乾燥地帯からやってくる遊牧民の圧力

遊牧民の圧力を遮断するには、強力な国家しかない

建設と破壊の繰り返しで内部熟成が困難

近世に遊牧的暴力を鎮圧

→ I 中国／II インド／III ロシア／IV トルコの大帝国が成立

第一地域は、高緯度温帯に位置し、適度な雨量のある森林地帯

旧世界の端（辺境）に位置していたことで、第二地域の遊牧民の暴力が及ばなかった

▼生態学のサクセション（遷移）理論の応用

歴史（文明・文化の発展）を人間（成長）や生物（進化）になぞらえるべきではない

個体としてではなく、システム（群れ）として把握するべき

木を見て森を見ず → 森（植生）を見て木を見ず

ケッペンの気候区分がすべての理解の根底にある

気候学の基本概念としての「理想大陸」

これまでの文明論は、地球というものを理解していない

生態学のサクセション理論（クレメンツ）が応用できる

裸の大地 → 地衣類・蘚苔類 → 枯死体がバクテリアによって分解

→ 一年草がわずかに生える → 多年草がとって代わる

→ 灌木が生える → 高木が生える（日照不足で多年草はなくなる）

→ 日照不足で樹種が交代（クロマツ→アラカシ）

気象条件など環境が激変しないかぎり、安定して代々再生産が続く（極相林）

環境が変化すれば、それに応じて生える植物も交代していく

環境が異なれば、そこに成育する植物も異なる

地域によって異なる森林ができあがる

第一地域は、サクセションが自成的

共同体内部の力によって自成的（オートジェニック）に展開

第二地域は、他成的（アロジェニック）

乾燥地帯からの圧力と破壊を絶え間なく受け続ける

▼自成的サクセションの第一地域

深い森林に覆われ、技術力が低い時代は、文明は興らなかった

辺境の未開の地＝塞外野蠻の地

第二地域の大帝国のイミテーションができる

随・唐帝国 → 律令国家、ローマ帝国 → フランク王国

中世には封建制社会が成立

小さな地域ごとに独自の共同体を経営

自律的な経営能力や勤勉・誠実の美德が育つ

近代ブルジョワジーと資本主義社会につながる → 市民革命

中世～近世にかけての日欧の共通性

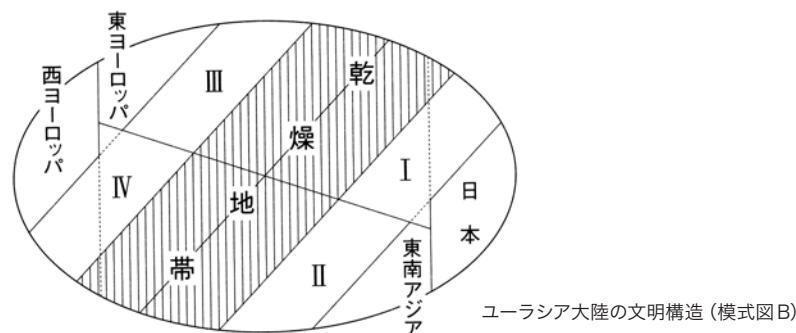
座＝ギルド、自由都市（堺＝フィレンツェ）、八幡船＝3本マストの帆船、居留地（日本人町＝外国人租界）、武士＝騎士、元寇＝モンゴル（タタール）の侵攻・ウィーン攻防

第二地域には、封建制は育たなかった

帝国主義的侵略

ようやく安定期に入った第二地域を植民地化して富を収奪

高度資本主義社会を実現



▼東南アジアの区分の追加

1957年の東南アジア踏査で、自説の矛盾を実感

東南アジアは第二地域（第一地域ではない）なのに、湿潤森林地帯

乾燥地帯の暴力とは無縁

工業の発展が遅れている（当時）

封建制→近代化は成立しなかった

模式図Bへの改変

インドと中国の外圧に絶え間なくさらされた地域

自成的サクセッションが展開しなかった

圧倒的に優勢な民族が存在しない→モザイク状に分布

言語、宗教も多様

▼東南アジアと共通性を持つ東欧

東南アジアと対称的に同じ位置に東欧がくる

ロシアとイスラーム圏からの外圧

東南アジアとさまざまな共通点がある

小国の集合……2つの世界に囲まれている

さまざまな異質的なものの並存

外部からの侵入の反復

大帝国の衛星国

→ 第一地域の植民地・属領化

三角の部分が、朝鮮半島とバルカン半島

都市と地方の民族構成が大きく異なる

現在の有力民族は他から移動してきた→民族移動の十字路

華僑（中国人）とユダヤ人が経済の実権を握る

統合中心を欠く

多数の民族が棲み分け

平野部が小さいので地域的にも文化的にも分裂（Forest Land）

●「文明の生態史観」の評価と批判

▼「文明の生態史観」の評価

戦後を代表する論文として、大きな評価を得る

刊行時（1957年）の日本は、「日本はもう戦後ではない」（経済白書）とようやく言われ始めた翌年

西欧（欧米）文明の到達地点がまだ遥か遠く、日本の後進性が常に話題に

日本1国が西欧と同等という主張が、多くの日本人に心地よかった

日本を「よし」とするのがためらわれる時代

本人の意に反して、ひとつの「日本論」として受け入れられる

反マルクス主義者からの支持

米国に先駆けてソ連のスプートニクが成功し、社会主義への自信深まった時期

とくに財界からの賛美の声

大阪万博の影のコーディネーターを務め、のちの民博創設へとつながる

比較文明論というジャンルが確立

「文化」より価値が低かった「文明」への認識が変わった

谷口財団の支援で国際シンポジウムを1999年まで開催

比較文明（文化）学というスタイルでの個別研究が進展

▼「文明の生態史観」への批判

「反発はあっても、反論はない」

同じ土俵で語れるものではない独自の梅棹世界

好き嫌いのレベルで判断

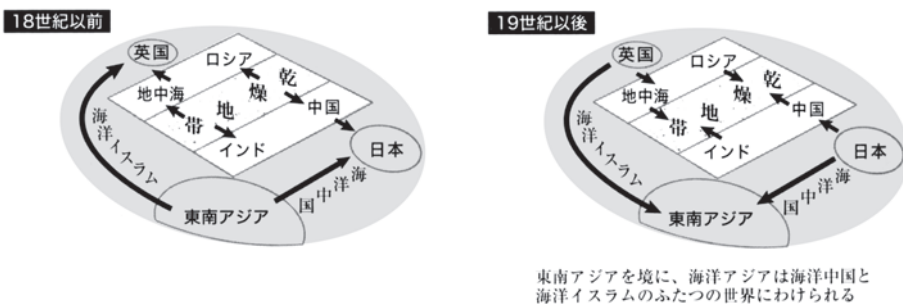
歴史の素人（理系の人間）が、時間をかけずに印象だけを書いたもの

大部の他の文明論に比べて、あまりにも簡潔
 あまりにも非人間的な環境決定論
 人間不在
 理想（人類のあるべき姿）を語っていない
 トインビーの世界国家、世界宗教
 議論がユーラシアに限定されている
 アフリカやオセアニアを含めるとどうなのか？
 とくに新大陸が抜けている
 近代までの過去を記述しただけ
 近代以降の世界を見るためには無力
 日本を高く評価しすぎている
 体制側や右翼・民族主義者に都合よく利用されていることへの反発
 アジアの後進国の分際で何を言うか……欧米での評価

▼川勝平太「文明の海洋史観」の展開

『日本文明と近代西洋——「鎖国」再考』（NHKブックス）1991
 『文明の海洋史観』（中央公論新社）1997
 梅棹忠夫、川勝平太「日本よ、縦に飛べ！——文明の未来を語る」『文藝春秋』第76巻第8号 1998
 梅棹忠夫、川勝平太「『文明の生態史観』の歴史的・今日的意義」『季刊民族学』第86号 1998
 『文化力』（ウェブ）2006

『文明の海洋史観』に描かれた海洋アジアの模式図



▼川勝による生態史観批判

梅棹生態史観には「海」という概念が欠落している
 西の地中海に対して、東に東南アジア・東シナ海が位置づけられる
 農耕革命、牧畜革命に対応する漁撈革命（船の革命）
 日本は、「海洋アジア」の辺境にあった
 倭寇、御朱印船、銀と鉄砲を輸出
 日本だけでなく、西欧も海洋アジアの辺境にあった
 大航海時代とは、西欧による海洋アジア産物の争奪戦
 綿、陶磁器、茶、砂糖、（スパイス）
 世界史は、海洋アジアを舞台に、16世紀から始まる
 やがて、海洋アジアの産物を自国で生産しようと、産業革命が起こった
 西欧は産業革命、市民革命を経て、海洋アジアを植民地化する
 日本は逆に鎖国をして、世界史の表舞台から切り離された
 幻のベンガル湾海戦（『日本史のしくみ』）

海洋アジアからの圧力で、西欧でも日本でも他成的サクセッションが起こった

東南アジアを舞台に交易を手がける中国系の海洋民による商業的・経済的な圧力
 世界（西欧も日本も）に他成的なサクセッションが起こり、近代化への道を走った
 梅棹生態史観では、日本も西欧も自成的サクセッションが展開したとされているが、近代では海洋アジアからの圧力による他成的サクセッションが大きな意味をもつ
 近代化を語るうえで、もはや乾燥地帯の暴力を考える必要はない

▼「文明の海洋史観」の意義

梅棹史観に欠落している海の視点を見事に補完

陸の論理（旧世界）と海の論理（地中海・海洋アジア）
 軽視されてきた東南アジア（海洋中国人）を正当に評価
 梅棹からも高い評価を得る

近現代史を初めて語れるようになった

スタティック（静的）な生態史観に代わって、ダイナミック（動的）な世界史を描き出す

▼「文明の海洋史観」への疑問

近現代史だけを見ることで、逆に内陸アジアの視点が欠けてしまう

海の論理と西欧・日本の論理のみで終始

あくまでも梅棹生態史観と対になって、史観として成立するものなのではないか

近現代史を見るための、数多くの視点のひとつ

海洋アジア（東シナ海）は熱く語るが、インド洋から西の海洋イスラームの役割は軽視

アラビア帆船（ダウ）の果たした役割はとてつもなく大きい

東南アジアがなぜいま停滞しているか、十分に答えていない

イギリス（と日本）に注目しすぎているのではないか

たとえイギリスで産業革命が成立したとしても、他の西欧諸国にあまり言及していない

大航海時代を誘引した「スパイス」について、あまり意識していない

梅棹生態史観と同様、新大陸にほとんど言及されていない

19～20世紀にかけてのアメリカ合州国が論じられていない

近代は語れるが、現代はやはり語れない

▼川勝氏の論の組み立てや方法論への疑問

日本文化の独自性や価値を、他国への優越感を持って語っているように感じられる

中国やイスラームへの差別意識（コンプレックス?）が根底にある?

梅棹との対談では的確な理解とヨイショを示しているのに、別の場でクソミソにけなす

「梅棹忠夫著作集（全22巻+別巻）は旅行記ばかりで、唯一残るのが、生態史観のあの図1枚のみ」と批判

今西錦司を師とあおぎ、今西を理解していないと梅棹を断罪

現場を歩いていないため、海というものを知らないままではないか?

博物館は一応見ているようだが、実際の走っている船は見えていない

「島島いに行った」→対談中、梅棹に直ちに否定される（マダガスカルの例）

現存する各地の漁撈民とまったく接触していない

帆船の写真も借り物

衣食住の記述もほとんどない（関心がない）

文献に出てくる事項や時代を重視しすぎではないか?

無文字社会を知らない

生態学に関心がない

梅棹生態史観の根幹にあるケッペン気候区分を理解しないまま、図を改変

エコロジーではなくエコノミー

●「文明の生態史観」の今日的意味

▼現代でも活かせる視点

梅棹生態史観の独創性と魅力

文明の概念を文化（の集大成）から切り離し、「装置と制度」であると定義した

系譜論ではなく機能論から文明を論じた

ケッペンの気候区分を根底に、グローバルな視野で考えようとした

生態学のサクセション理論を応用

自分の目で見た市井の人々の暮らし（生活様式）から発想した

現場をフィールドワークして、そこから考えている

平易でわかりやすい文体で、高度な概念までクールに述べた

ペダンティックな態度が感じられない

近代化の本質を的確に喝破しながら、温かい眼差しを見せる

「よりよい暮らし」こそ、人類共通の悲願

「心の平安」への願いは、「よりよい暮らし」の競争相手ではない

第二地域の人たちは、すべてあすの「よりよい暮らし」への希望をもつことができる

▼見えにくくなってきた構造

20世紀末における第二地域の経済発展で、第一地域との違いが見えにくくなっている

世界の工場になった中国経済の著しい発展

停滞する日本の経済や科学技術力

日本の若い世代には、文明の生態史観がピンとこない

メディアに出てくる部分のみを見て、地方の暮らしが見えない

現実には大きな格差がある（高田公理（『文明の生態史観』と今日の世界』『梅棹忠夫に挑む』より）

第一地域……面積：3.1%・人口：8.4%・地域総生産：42.4%

日本……面積：0.3%・人口：2%・地域総生産：11%

第二地域……面積：34.6%・人口：63.3%・地域総生産17.5%

人口一人あたりの地域総生産（ドル）

第一地域（日本と西欧）と北米、オセアニア……3万5000ドル前後に到達

第二地域 東欧……7000ドル

ロシア・中南米……5000ドル前後

文化力——日本の底力

川勝平太著／ウェッジ

高校時代に『知的生産の技術』にかぶれてひらがなタイプライターを買い込み、学校へ毎日持って通ったほどの梅棹忠夫ファンだったし、『文明の生態史観』を初めて読んだときの衝撃はいまでも忘れられない。おかげで著者の『文明の海洋史観』が書店に並んだときも「生態史観批判」を掲げた帯の文句に反感を感じて、数ページ立ち読みしただけで終わった。

そんな私が本書を手にしたのは、後半に収められた対談のひとつが梅棹とのものだ。ただ、著者が生態史観の今日的な意義を的確に挙げながら自らの海洋史観を披露していく手際のよさに、まず驚かされた。生態史観ではユーラシアの乾燥地帯に注目し、そこで興った遊牧社会からの軍事的な圧力を論の中核に据えるが、海洋史観では東南アジアを舞台に交易を手がける中国系の海洋民による商業的・経済的な圧力が重視される。私が以前から感じていた梅棹モデルへの疑

問点や物足りなさが、海洋アジアからの視点を取り入れることで次々と解消されていくようで、これまで海洋史観をいたずらに遠ざけてきたことを後悔した。

巨人梅棹とがっぷり四つに組み、丁々発止と対談を進める著者の博識ぶりにも感服。搾乳と去勢技術に着目した梅棹の牧畜革命に呼応して造船技術による漁撈革命を提唱するなど、海洋史観は三十年先行した生態史観を見事に補完する新モデルだと、つくづく感じさせられた。

その後に入江隆則、三浦雅士、伊東俊太郎との文明論をめぐる三つの対談が続き、海洋史観ならではの視点や著者の学問的な背景もよくわかっておおいに刺激を受けたが、伊東との対談の後半に出てくる生態史観批判のトーンには、思わずたじろいだ。梅棹忠夫全集は紀行文ばかりで、唯一残るものはあの有名な文明の生態史観の図一編だけだという発言もあり、著者が心酔する梅棹の師・今西錦司の進化論とは似て非なるものだと思いつている。ならば、先の対談であれほどヨイショをせずに、批判点をめぐって梅棹

本人とガチンコ勝負をしてほしかった。

本書の前半には新聞や雑誌に掲載された硬軟の諸原稿が並び、日本文化の特質が明らかにされる。どの論考も著者の専門である社会経済史による知見が新鮮で、味わい深い。ただし、日本人の自尊心をくすぐろうとする表現や解釈には微笑させられ、中国やイスラームに対する微妙な物言いにも居心地の悪さを覚えた。

著者は梅棹理論の骨格にある野蛮な暴力を否定し、鉄砲を捨てて徳川の平和を実現した士道精神の徳を讃える。日本の再軍備化が声高に主張されるいま、文化の力を軸とした調和型文明こそ日本のめざす道だという主張は貴重だ。この点をさらに打ち出して、海洋史観を世界に知らしめていつてほしい。（評・丸山 純）

（月刊『望星』2006年12月号）

かわかつ へいた 一九四八年京都府生まれ。国際日本文化センター教授。おもな著作に『日本文明と近代西洋』『富国・有徳論』『美の文明』をつくる』など。

梅棹忠夫 語る

語り手・梅棹忠夫／聞き手・小山修三
日本経済新聞出版社（日経プレミアシリーズ）

二〇一〇年の七月、国立民族学博物館（民博）の初代館長を務めた梅棹忠夫が九十歳で亡くなった。その二年前に米寿を祝うシンポジウムが開催されたが、本人が出席できなくなる場合を想定して、事前に計十五回のインタビューが重ねられていたという。それをまとめたのが本書で、戦後の日本を代表する知性の最後の語りを聞くことができる。

梅棹は座談の名手としてよく知られていて、私が初めてその名前を意識したのも、師である今々錦司を囲んで門下生たちが集まった座談会の文章だった。博学ぶりの披露から機知に富んだ会話の応酬、ストレートで辛辣な物言いなど、当時高校生だった私に強烈な印象を残した。

本書ではそんな梅棹の魅力を、聞き手の小山修三がじつにうまく引き出している。巧みに水を向けて思う存分語らせながら、的確に合いの手をはさんで真意を

質し、味わい深いキメの言葉を吐かせてしまう。民博の初期から梅棹を支えてきた付き合いの長さと、著作を充分に読み込んでいるからこそできる離れ業だ。

おかげで「そや、そや」と身乗り出してくる梅棹の姿が、行間からいつも浮かんでくる。本を読むところこそが学問だと勘違いしている日本の学者たちへの痛烈な批判から、ユニークな文明論の基盤となった数々のフィールド体験、虚飾を一切排すべしという文章論、さらにはリーダーシップ論から若き日の挫折体験まで、まさに広大な「梅棹世界」を時空を超えて自由奔放に駆け巡る感じで、息もつかせない。そして、最後にたどり着く「自分は老荘の徒であるニヒリストで、明るいペシミストである」という自画像に、深くうなずかされることになる。

痛快無比の人生論として読める本書で梅棹を知った若い世代が他の著作に手を伸ばし、その深い思想に触れてくれるのをおおいに期待したい。（評・丸山 純）

（月刊『望星』2011年1月号）

イスラーム圏・中国・東南アジア……2000ドル前後

インド・アフリカ……500ドル以下

「よりよい暮らし」への願いと富の遍在が現実の世界に横たわっている

目を背けず、なぜそうなのかを見つめたい

この格差こそ、国際社会を不安定にする

民族問題、宗教対立などを考える素材としても有効

エッセイとしても気軽に読める

なにげないひとことに、深い意味や考察のヒントが数多く隠されている

川勝海洋史観のように、梅棹生態史観を補完する論考を期待

とくに新大陸をいかに包括するかがテーマ

『文明の生態史観』より

第一地域と第二地域 (pp.201-202)

まず、東洋とか西洋とかいうわけかたは、ナンセンスである。文化伝播の起源によってわけける系譜論の立場をさって、共同体の生活様式のデザインを問題にする機能論の立場をとる。すると、アジア、ヨーロッパ、北アフリカをふくむ全旧世界は、ふたつのカテゴリーにわけることができる。ひとつは、西ヨーロッパおよび日本をふくむところの、第一地域である。もうひとつは、そのあいだにはさまれた全大陸である。第一地域は、歴史の型からいえば、塞外野蛮の民としてスタートし、第二地域からの文明を導入し、のちに、封建制、絶対主義、ブルジョア革命をへて、現代は資本主義による高度の近代文明をもつ地域である。第二地域は、もともと古代文明はすべてこの地域に発生しながら、封建制を発展させることなく、その後巨大な専制帝国をつくり、その矛盾になやみ、おおくは第一地域諸国の植民地ないしは半植民地となり、最近にいたってようやく、数段階の革命をへながら、あたらしい近代化の道をたどろうとしている地域である。

(中略) その趣旨を模式図にすると、A図のようにかくことができる。全旧世界を、横長の長円であらわし、左右の端にちかいところで垂直線をひくと、その外側が第一地域で、その内側が第二地域である。

第一地域の日本と西ヨーロッパははるか東西にはなれているにもかかわらず、その両者のたどった歴史の型は、ひじょうによくにている。両者の歴史のなかには、たくさんの平行現象をみとめることができる。それはなぜか。それをとくためには、むしろ第二地域に目をうつさなければならぬ。

旧世界の構造 (pp.202-203)

旧世界の生態学的構造をみると、たいへんいちじるしいことは、大陸をななめによこぎって、東北から西南にはしる大乾燥地帯の存在である。歴史にとって、これが重大な役わりをはたす。乾燥地帯は悪魔の巣である。暴力と破壊の源泉である。ここから、古来くりかえし遊牧民そのほかのメチャクチャな暴力があらわれて、その周辺の文明の世界を破壊した。文明社会は、しばしば回復できないほどの打撃をうける。これが第二地域である。

第一地域は、暴力の源泉からとおく、破壊からまもられて、中緯度温帯の好条件のなかに、ぬくぬくと成長する。自分の内部からの成長によって、なんどかの脱皮をくりかえし、現在にいたる。西ヨーロッパも日本もおなじ条件にあった。

第一地域のなかに、日本と西ヨーロッパという平行現象があったように、第二地域のなかにも、いくつかの部分があつて、それぞれが平行現象をしめすことを指摘した。第二地域のなかには、四つの大共同体—あるいは世界、あるいは文明圏といつてもよい—にわかれる。すなわち、(I) 中国世界、(II) インド世界、(III) ロシア世界、(IV) 地中海・イスラーム世界である。いずれも、巨大帝国とその周辺をとりまく衛星国という構造をもっている。現在では、帝国はいずれもつぶれたけれど、共同体としての一体性はきえさったわけではない。現在なお、この四大ブロック併立状態再

現の可能性はひじょうにつよい。

以上が生態史観という名まえのもとに提出した、わたしの見かたのアウトラインである。(中略)

あゆんできた歴史の道すじの型という点では、第一地域と第二地域とのちがいは重要である。それは、社会制度、宗教、文化の広はんな範囲にわたるちがいをまきおこす。とくに日本に注目していえば、第一地域に属する日本は、第二地域に属する中国世界、インド世界などの国ぐににくらべて、地理的におなじアジアに属しながら、内容的にはいちじるしいちがいをもっているのである。アジアにおける日本の特殊性というものは、だから、第一地域としての特殊性である。日本はむしろ、西ヨーロッパとおなじカテゴリーにはいる地域である。」

破壊力の源・乾燥地帯 (pp.124-125)

乾燥地帯は悪魔の巣だ。乾燥地帯のまんなかからあらわれてくる人間の集団は、どうしてあれほどはげしい破壊力をしめすことができるのだろうか。わたしは、わたしの研究者としての経歴を、遊牧民の生態というテーマではじめたのだけれど、いまだにその原因についての確かなことをいうことはできない。とにかく、むかしから、なんべんでも、ものすごくむちゃくちゃな連中が、この乾燥した地帯のなかからでてきて、文明の世界を嵐のようにふきぬけていった。そのあと、文明はしばしばいやすことのむづかしい打撃をうける。

遊牧民はその破壊力の主流であり、そのお手本を提供したけれど、破壊力をふるうのは遊牧民とはかぎらない。そののち、乾燥地帯をめぐる文明社会そのもののなかからも、猛烈な暴力が発生するにいたる。北方では、匈奴、モンゴル、ツングース、南方ではイスラーム社会そのものが、暴力の源泉のひとつになる。

第二地域の歴史は、だいたいにおいて、破壊と征服の歴史である。王朝は、暴力を有効に排除しえたときだけ、うまくさかえる。その場合も、いつおそいかかってくるかもしれないあたらしい暴力に対して、いつも身がまえていなければならない。それは、おびたしい生産力の浪費ではなかったか。

たいへん単純化してしまったようだが、第二地域の特殊性は、けっきょくこれだとおもう。建設と破壊のたえざるくりかえし。そこでは、一時はりっぱな社会をつくることができても、その内部矛盾がたまつてあたらしい革命的展開にいたるまで成熟することができない。もともと、そういう条件の土地なのだった。

近世にはいつて、はじめて遊牧的暴力はほぼ鎮圧され、第二地域における四大帝国、中国、ロシア、インド、トルコが成立する。皮肉なことには、ちょうどそのころから、第二地域は、こんどは背後の、沿岸の森林地帯からあらわれてきたあたらしい暴力、第一地域の侵略的勢力にたちむかうことになる。けっきょく、第二地域における革命的展開は、全部今世紀までもちこされ、第一地域からの圧力のもとに、はじめて、それも第一地域とはべつの意味のものとして遂行されることとなった。